

國文學の傳燈

桃園文庫の世界

〈写す・読む・伝える〉



2012. 5. 11

東海大学付属図書館
東海大学文学部日本文学科 共催

◇展示にあたって◇

この度、東海大学湘南校舎に於いて「上代文学会」が開催されることとなりました（5月12日～14日）。

「上代文学会」は昭和44年5月に湘南校舎で開かれ、実に43年ぶりの開催となります。同会の会長、高本市之助氏（当時81歳）が挨拶に立たれ、会場はほぼ満席の盛況であったと記録に残っております。



校舎内万葉歌碑（2号館前）

昭和51年11月には大山（阿夫利山）を望む湘南校舎の一隅に、日本文学科によって万葉歌碑が建てられました。碑面には松前重義博士の染筆で、万葉集卷十四の相模国の歌、「相模嶺の小峰見そくし忘れ来る妹が名よびて吾をねし泣くな」が万葉仮名で刻まれてあります。ふりかえれば富士の山の手前にヤマトタケルが妻をしのび、万葉集の東歌に詠まれる足柄峠を望めます。また厚木の在には、古事記に見える「さねさし相模の小野」の故地と伝えられる小野神社、海老名には、礎石をとどめている国分寺跡があります。

このように古代から歴史や文学に縁ある地、東海大学湘南校舎において再び「上代文学会」が開かれることを、大変喜ばしく思います。

今回はこの学会の開催を期に、文学部日本文学科との共催で「國文学の傳燈く写す・読む・伝える」と題して展示会を企画しました。展示資料は池田亀鑑博士が研究の過程で苦勞して収集された古典籍や原稿類などを「桃園文庫」の中から選びました。貴重な古典がどのように伝承されてきたのか、また池田亀鑑博士が「文献批判的研究」という新たな学問的方法を樹立し、日本文学の輝かしい一時代を築いた軌跡を垣間見ていただければ幸いです。

國文學の傳燈

桃園文庫と国文学研究

東海大学付属図書館（当時「東海大学附属図書館」）が建学 30 周年事業の一環として池田亀鑑博士（1896－1956）の蔵書「桃園文庫」を譲りうけたのは 1973 年のことでした。近代の国文学研究の歩みの中で、文献批判的研究という方法を樹立した池田博士の研究成果は『伊勢物語に就きての研究』（1933）、『古典の批判的処置に関する研究』（1941）などを経て『校異源氏物語』（1942）『源氏物語大成』（1953-1956）に結晶されます。さらには徒然草の研究にむかうところで惜しくも多くの資料を残して世を去られましたが、それらの研究の資料として蒐集された古写本、古注釈書の類、さらには亀鑑博士の父君をはじめ、奥さま、家族、弟子たちの力を得て作成された写本やノートが「桃園文庫」に残されています。

池田博士の文献批判的研究というのは、ドイツ文献学の影響のもと、多くの本文を相互参照して伝来の中、形を変えてきた本文の姿を復元するという方法で、『古典の批判的処置に関する研究』では土佐日記の紀貫之自筆本の復原に成功しています。

博士による啓蒙書『古典学入門』（岩波文庫）には、その方法が簡潔に示されていますが、この著書の中で博士はまず写本される現場の調査から語りはじめます。単に文献を集めて比較するだけではなく、古典が伝来されてきた当時の様子まで想定して研究を進めていく態度は、折口信夫博士（1877－1953）の樹立した民俗学的文学研究——人々が生活してゆく中で文学がどのように発生するかを論理化する研究方法——にも通じる姿勢がうかがえます。

しかし、池田博士の研究方法はそれまでの国文学研究を否定して成し遂げられたわけではありません。むしろ平安時代以来伝えられてきた研究方法をより科学的に磨きぬいていったものと考えてのがよいでしょう。桃園文庫に残された古写本や古注釈書が証拠です。これらの写本は、ただ書き写されただけではなく、行間や余白に種々の書き入れがあります。他の写本との本文の相違に関する書き入れ、語の意味についての書き入れなど、その作品を読もうとした人が、どのように本文と向き合ったかの記録が残されています。またその作品についての注釈の写本や作品についての講義の聞き書きも写本として流布していきます。そうやって読み継がれ、今に伝えられてきた古典作品への向き合い方を研究方法として形に示したのが池田博士の業績です。



桃園文庫（東海大学付属図書館書庫内）

展 示 解 説

I 桃園文庫の世界

I-1 東海大学蔵桃園文庫影印叢書（刊本）1990～1996 東海大学桃園文庫影印刊行委員会

桃園文庫所蔵本の中から重要な写本を選び出し影印本（白黒写真による写本）として東海大学桃園文庫影印刊行委員会の手により東海大学出版会から刊行されたもの。（実物→展示No.Ⅱ-1～10）

I-2 桃園文庫目録（上・中）（刊本）1986・198 東海大学附属図書館

桃園文庫を譲り受けて、東海大学付属図書館整理課および文学部日本文学科の金子金治郎、蟹江秀明、鍛冶光雄によって分類整理された目録で昭和61年に古典籍分の調査が終了し刊行された。現在ノート・原稿類等の整理が続けられ、2013年には下巻として刊行される予定。

I-3 『古典の批判的処置に関する研究』 1941 岩波書店

I-4 『伊勢物語に就きての研究』 1933 大岡山書店

I-5 『校異源氏物語』 1942 中央公論社

I-6 『校異源氏物語』 原稿

I-7 『源氏物語大成』 1953－1956 中央公論社

以上は池田亀鑑博士の代表的な研究である。これらの原稿も残され、現在整理が続けられている。『校異源氏物語』の原稿は池田博士だけではなく、弟子たちの筆が多くみられる。博士が研究プロジェクトのプロデューサー的立場にあって資料調査や写本を行っていたことがわかる。

I-8 池田亀鑑伊勢物語諸本研究資料（研究資料）〔桃2／73〕

桐函に収められた研究資料群で、『伊勢物語に就きての研究』を著すときに用いたものと思われる。大学ノートや原稿用紙などを用いて、調査対象の写本について記録している。

・大島本伊勢物語校異本 全一冊

大島本の本文をペンで書写し、鉛筆による書き入れがある。底本を尊重しつつ、本文を精査していく忠実な姿勢が、緻密な筆致に表れている。なお凡例部分には訂正の書き入れが多くあり、原稿を推敲する過程が生々しく残されている。原稿用紙を再利用しており、もともと書いてあったペンの字を消してもとの字が残る上に青いペンで大島本本文が書写してある。

・伊勢物語 皇太后宮越後本 一冊

皇太后宮越後本の本文をペンで書写し、仮名遣いや固有名詞の表記について鉛筆で書き入れて校合している。ペン書き本文では欠けている末尾部分を、鉛筆書き本文で補ってある。初段冒頭部分では、「おとこ」の「お」の表記を鉛筆で「を」と直しており、そのような書き入れが全編にわたって行われている。仮名表記の様相を細かに見て、行数・字送りをもとのままに書写する姿勢が貫かれている。

・伊勢物語 皇太后宮越後本 一冊（大学ノート）

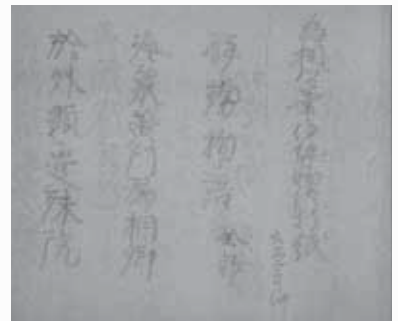
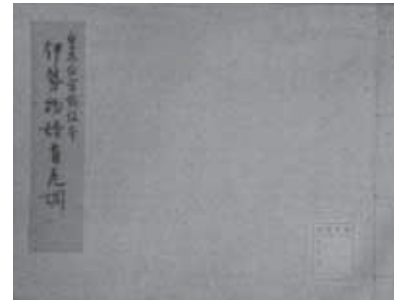
大学ノートを用いた研究資料。皇太后宮越後本伊勢物語に臨んで、大学ノートをばらして皇太后宮越後本の大きさを示す線を引く、本文を書き写して綴じている。本文はペンで書かれ、初段では「しのふりの」の「ふ」の下に鉛筆で「す ナシ㊦」とあるなど、底本の脱字を補う書き入れがある。酒井宇吉氏蔵本（伝冷泉為相筆）により校合したものを昭和26年6月に再び行数・字詰等を原本に照合させ、漢字・仮名の区別、料紙の綴じ方を原本の通りに復原した由が奥に記されている。行の目移り等により書き間違えてしまった本文を、同じ大学ノートの紙を罫線が合うように丁寧に貼り付け、直してある所が数箇所ある。貼り付けた紙が曲がらないように皺にならないように、真っ直ぐ丁寧に細く切られていて、几帳面で細かい仕事ぶりを見ることができる。

• 皇太后宮越後本 伊勢物語 一冊

写本に薄い紙を載せて透写したと見られる一冊。鉛筆書きでありながら原本の筆の筆致をそのままに再現している。複数の書体を忠実に、太さや筆の流れがわかるように示し、美しい。複数の異なる書体が確認できる。

• 伊勢物語 一冊（袖珍本）

原稿用紙を再利用し、原本と同じ大きさに紙を切り、和綴で綴じられている。本文は鉛筆で、1頁ごとに初めと終わりの語句のみ、示されている。頁数を上部にふってあり、丁数（1丁オ、1丁ウ）のふり方とは異なっている。13頁は書き方が異なり、行頭部分に点線があり、伊勢物語七段冒頭部分が「むかし……／てあつま……あはひ」と、注目した形跡がある。なお、七段の前に書かれている「みもせぬ人のこひ」は六段にはない。1頁ごとに首尾のみ写すことで、諸本の頁送りを精査しようとしたものか。微細な部分に目を向ける研究態度がうかがえる。



I-9 架蔵伊勢物語版本目録(研究資料)〔桃3/151〕

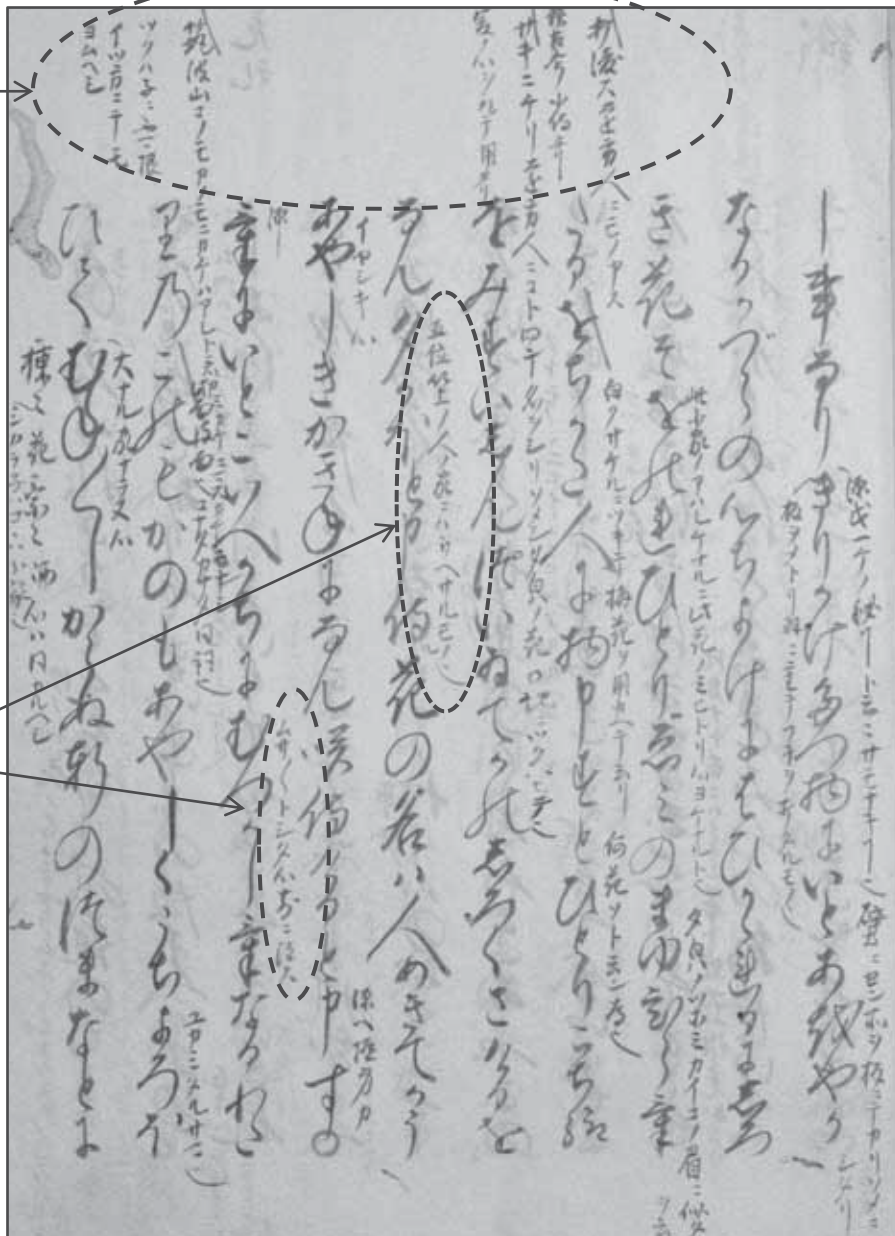
所蔵する板本の書誌情報を詳細に記し、まとめて整理したもの。一つ一つの書誌を朱と青のペンで記し、中にはメモ書きが付けられている。ここにも一つ一つの資料に対する細かな目配りがうかがえる。

I-10 出雲風土記・拾遺集・詞華集註・図書寮本解説 池田亀鑑〔桃27/20〕

この位置に書き込まれた註を「首書（頭書）」と呼びます。
かしらがき

※書かれた位置による名称の使い分けで、本文への註記であることはわかりません。

行間にある註を「傍書」と呼びます。
かたわらがき



源氏物語「夕顔」(2丁オ)(紹巴自判本校合本)[桃6/52]・ 展示No. II - 11

↑
頁数がないので、紙一枚を「丁」と数え、オモテ・ウラで示します。

(この言葉は「乱丁」「落丁」という言葉で現在にも残っています。)

Ⅱ 写して読む、そして伝える

古典文学の作品が写本という形で今に伝えられていることは、よく知られていることです。読みたいから書き写す。印刷技術のない時代だから当然のように思えますが、実はすでに印刷出版技術が成立していた江戸時代でも写本は作られ続けました。版本（印刷出版された本）から写本がつくられたものも少なくありません。

池田亀鑑博士も自ら、あるいは近い人を通して、多くの写本を作成しています。それが研究のためであることは自明ですが、その根底には、よりよい本文を求めよう、しっかりと本文を読もうとする気持ちがあることを忘れてはなりません。

その気持ちは昔から今へ伝わってきていたものです。

書き写す。ほかの写本との違いを確認する。国文学研究の最初の一步です。作品をきちんと読みたい、という気持ちは、よりよい本文を求めるところから出発します。そこでよりよい本文を求めて写本が作られ、さらには他の写本との比較も行われます。これを「校合」（テキスト・クリティーク）といいます。校合して本来あるべき字を復原して本文を作成するのが「校訂」と呼ばれる作業で、そうして作成された本文を「校訂本文」と呼びます。また、連綿と続く本文をどう読むのか、朱や墨で句読点や声点（イントネーションや清濁）を書き入れたりしています。

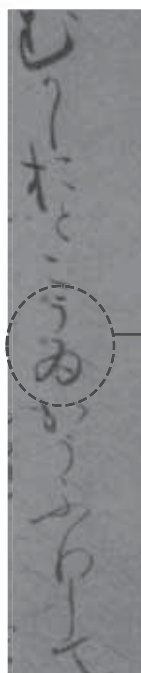
写本を見ると、写す元となった写本（「祖本」といいます）に書き入れられた句読点や校合の跡、注釈なども一緒に写されたり、書き写した人の校合の跡や注記も見られます。また版本の本文を用いて写本から注記や点（記号）を書き写したりもしています。それも学びの痕跡です。こういった作品本文の余白にいろいろと書き込まれている文やメモ、点を「書入」と呼びます。書入がなくてゴージャスな紙（料紙）を用い装丁も立派なのは「嫁入本」などと呼ばれる美術品として作られた写本です。

今回、展示された写本の本文の脇や上などにもいろいろと書入がみられますので、注意してみてください。



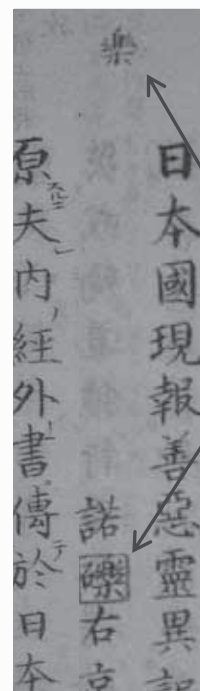
きさらぎのはつるあまり
えんせさせたまふ。南殿のさくらの
后春宮の御つほね、左

紹巴自判本源氏物語
「花の宴」（1丁オ）
〔桃6／34〕・展示No.Ⅱ-12



「うゐかうふり」（初冠）の「うゐ」を高く発声する印。

伊勢物語（1丁ウ）〔桃2／1〕
・展示No.Ⅱ-8



下の□で囲まれた字を校訂したものが首書されています。

日本国現報善惡靈異記（1丁オ）
〔桃13／3〕・展示No.Ⅱ-17

【1】桃園文庫影印叢書におさめられた写本たち

II-1 青谿書屋本土佐日記 (写本) [桃 21/20] 影印叢書収録

次の明融本源氏物語と並んで東海大学附属図書館蔵桃園文庫を代表する写本。函には「土佐日記 權中納言藤原爲家筆」とあり、棘舎文庫ラベル、「青谿書屋」「大嶋所蔵」印がある。「青谿書屋」とは三井合名会社理事で佐々木信綱に和歌を学んだ大島雄太郎(1868-1948)の蒐集した源氏物語を中心とする古典籍コレクションの名称である。

15世紀くらいまで蓮華王院に伝えられていたという貫之自筆本を祖本とし、仮名遣いを忠実に写したという冷泉爲家筆本(大阪青山歴史文学館蔵)の臨模本で、池田博士による貫之本復原の重要な証本となった写本。

II-2 明融本源氏物語 (写本) [桃 6/49] 影印叢書収録

室町時代、冷泉爲和(1486-1549)の息子、高雲軒明融の手による写本。定家自筆本「柏木」巻とこの明融本「柏木」巻とを比較すると、定家自筆本の模写(臨模本)であると判断され、定家自筆本が四巻しか伝わらない中であって、残り七巻とともに源氏物語本文研究上、重要な写本とされている。

II-3 伝藤原爲氏筆本源氏物語 宿木巻 (写本) [桃6/138] 影印叢書収録

世に爲氏流といわれているものの一類で青表紙系の本文を持つ。極札四通に爲氏筆、爲教外題とある。鎌倉時代末期の写本。

II-4 九條家本源氏物語系図 (写本) [桃8/142] 影印叢書収録

巻頭巻尾を欠くが、鎌倉時代初期の写本。爲氏本『源氏物語系図』と同系統だがそれより原始的形態を有するという(「爲氏本源氏物語系図」ペン写「亀鑑云」[桃 8/147])。

II-5 伝越部禅尼筆本源氏物語系図 (写本) [桃 8/143] 影印叢書収録

巻尾を欠き常陸宮より明石乳母まで。鎌倉時代初期の写本。九條家本の系図はこの写本を整理したものかと池田博士は推定している([桃 8/144]「源氏物語系図」付箋)。

II-6 ト部本徒然草(写本) [桃 19/11] 影印叢書収録

吉田子爵家(吉田ト部家直系)伝来の写本。昭和24年、池田博士はこの写本を前にして「蓋し天下の孤本にして、また徒然草最古の形態を存するものならん。ああ徒然草の成立の秘密つひに分明するか。ああ待望の日つひに到来するか。感無量、このよろこびを誰に告げむ。終夜眠るあたはず」と書きつけた。

II-7 藍表紙本徒然草(写本) [桃 19/33] 影印叢書収録

これにも「青谿書屋」の印がある。流布本の系統本文を持つ。天正以前、大永頃の写本かといい、烏丸光廣による本文校訂以前にほぼ同じ本文が成立していたことを示す点に価値がある(本書巻末、待井新一による識語)。

II-8 伊勢物語 写本(室町末期写)〔桃2/1〕影印叢書収録

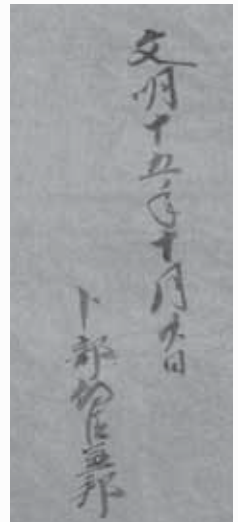
室町中期の写本であるが保存状態が良く、字体も流麗で美しい。長文の奥書があり、定家本諸本のうちの流布本(根源本)の一本である。注が書き入れられ、語の一部分に朱で点が書き入れられてある。注が独立して付けられるのではなく、本文に書きこまれる形で徐々に増えて行った、その初期の形を見ることができる。注釈書として独立していないものの、多くの注がすでに書き込まれており、根源本の特色である長文の奥書にも「古人説」に対する異を唱える姿勢が見える。

II-9 伊勢物語 写本(ト部兼邦書写本)〔桃2/14〕影印叢書収録

室町中期の写本で奥書に「天福二年」とあり、定家本諸本のうちの天福本である。流布本に比べ本文の優秀性が際立っている。〔桃2-1〕(→II-8)の写本に比べ字体の流麗さには欠けるが、定家の自筆本を一字も替えず書写したという奥書を証明するように、書体は定家様を踏襲した書きぶりである。〔桃2-1〕に比べて注が少なく、定家の注と本文をそのまま伝えようとする、書写者の原本に忠実な姿勢が貫かれた一冊である。

書写者 ト部兼邦とその一族

ト部兼邦(?-?)は神道学者吉田兼俱(1435~1511)の弟である。ト部朝臣家は平安時代以来、宮廷の神官を務めた家柄である。神祇大副に任命され、侍講も果し、吉田神社と平野神社の神主も務めた。代々日本書紀や古事記等の解釈秘伝を伝え、あわせて古典研究を行ってきた。鎌倉時代のト部兼文・兼方による『釈日本紀』と題された日本書紀の注釈書はよく知られ、ト部兼夏や兼方による神代卷の写本は伝存最古の写本として国宝に指定されている。室町時代、足利義満のころに兼夏の直系子孫で吉田神社の神主を務めた兼熙から吉田を名乗るようになった。ちなみに『徒然草』の著者、兼好法師はト部家の傍流だが吉田の家の者ではない。室町時代になると吉田の家には学問の伝授が途絶える危機が何度か訪れるが、その学問を一時的に預かった一人が一條兼良(→III-14)である。兼熙の直系子孫の吉田兼俱は、長じて一條兼良からの教えを受けて家伝来の学問を継承し神道の家再興を果たした(吉田神道)。吉田の家は兼俱の長男が継いだ。次男兼永は平野神社の神主家に養子に出、三男は明経道の家である清原家に養子に出た。この三男が清原宣賢(→III-5)である。そして宣賢の次男兼右(→III-11)が吉田の家を継ぎ、娘は細川幽齋(→III-7)の母となった。



II-10 伊勢物語 写本(豊原統秋書写本)〔桃2/23〕影印叢書収録

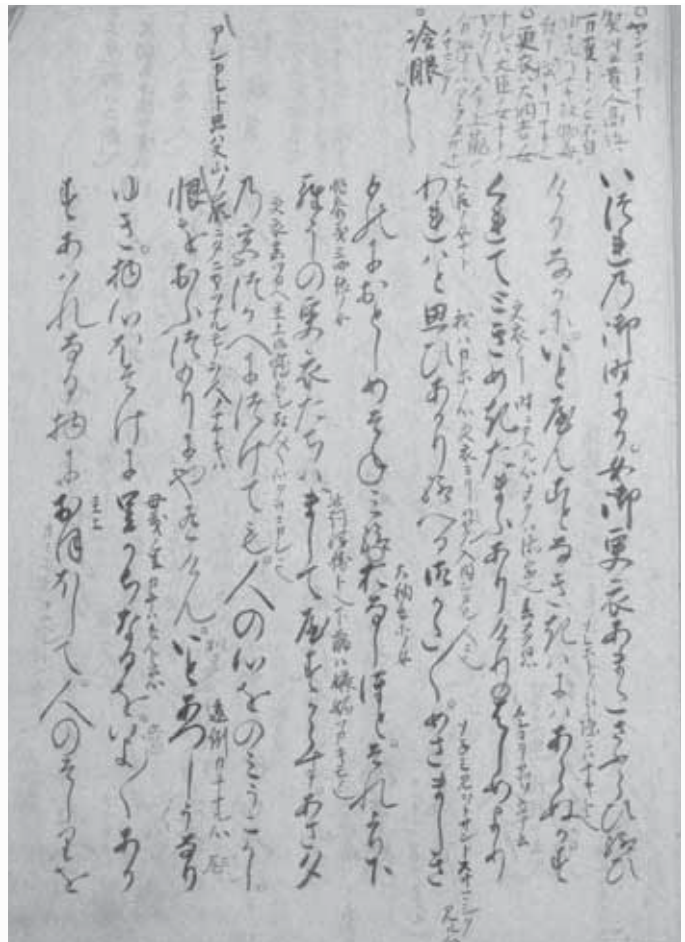
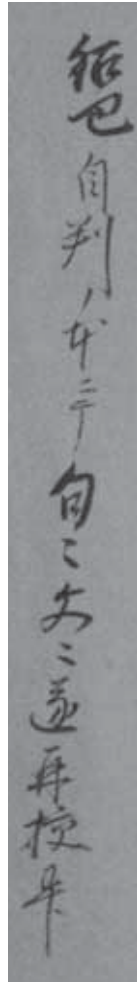
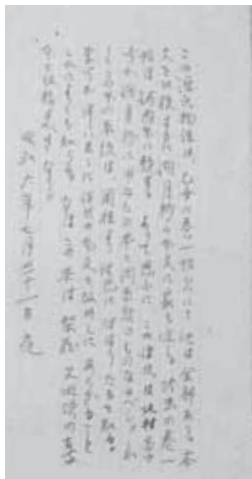
本文最後に別筆で「此物語始終筑後守統秋染芳筆物也(花押)」とあるが池田博士は烏丸光廣の筆としている。豊原統秋(1450-1524)は笙を扱う楽人の家に生まれ、応仁の戦いで乱れ行く世の中にあつて雅楽の伝統を守ろうとした人物である。三條西實隆や連歌師宗長に和歌を学んだ。一方烏丸光廣(1576-1638)は清原宣賢に儒学を学び細川幽齋から古今伝授を受けた公卿として知られ、後陽成天皇や後水尾天皇の信頼も厚かった。

【2】その他の写本たち

■源氏物語■

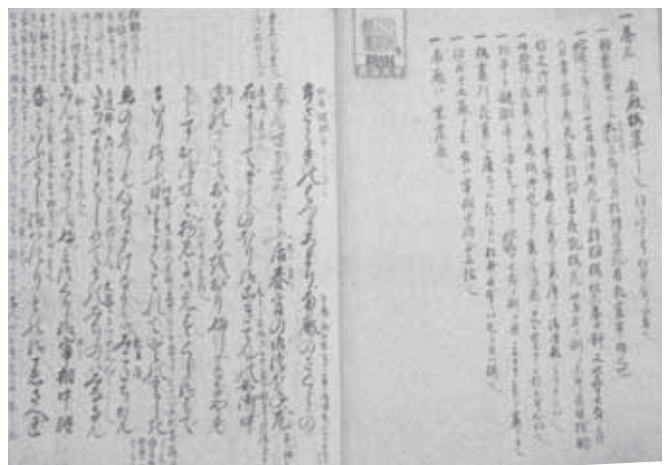
II-11 紹巴自判本校合本源氏物語（写本）〔桃6／52〕

江戸初期の写。「帚木」巻に「紹巴自判ノ本ニテ句々文々遂再校畢」の識語がある。〔桃6／34〕（→II-12）とともに青表紙系本文で亀鑑のメモ（桐壺巻表紙見返し）には「この源氏物語は乙女の巻一帖欠にて他は全部あり。本文を比較するに湖月抄の本文に最も近し」云々とあるが、東海大学桃園文庫には「桐壺」から「紅葉賀」までしか残されていない。



II-12 紹巴自判本源氏物語（写本）〔桃6／34〕

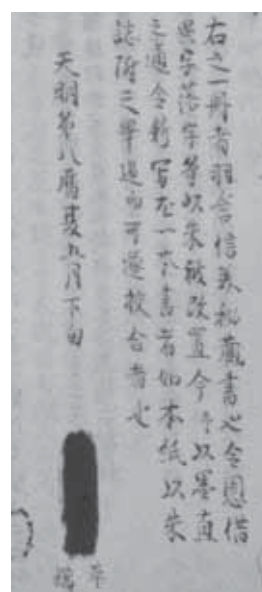
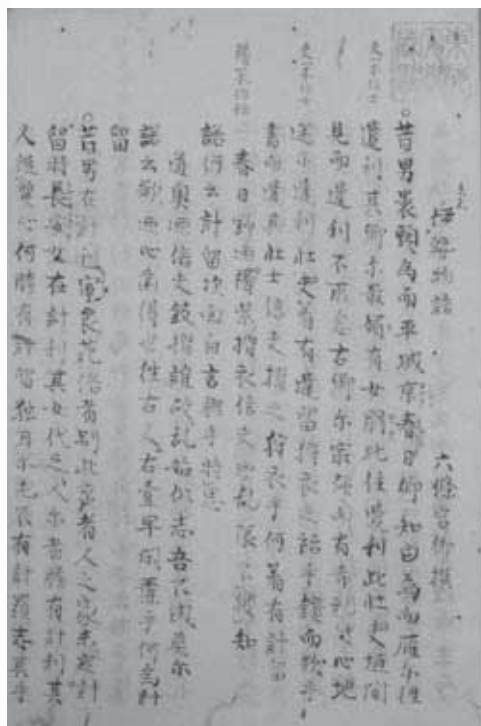
〔桃6／52〕（→II-11）の亀鑑のメモに、「しかしてこの本の系統は、周桂より紹巴に伝はりたるを知る。」とあるが、当該写本においても周桂より紹巴に伝わった由、奥書に記されている。こちらは「葵」から「浮舟」までしか伝わらない。里村紹巴（1525～1602）は室町末期の連歌師として著名で、本能寺の変の直前に明智光秀らと連歌の会を催したことや、『源氏物語』の注釈書『紹巴抄』を著したことでも知られる。



■伊勢物語■

II-13 真名伊勢物語（写本）〔桃2／35〕

冒頭から奥書に至るまで、全編にわたって真名（漢字）で書かれている。固有名詞は該当する漢字をあてているが、「往にけり」を「往遣利」とするように、付属語部分は一音一字の万葉仮名表記で記されている。奥書に「右者羽倉信美秘蔵書也」と見え、荷田家伝来の本を祖本とした天明期の写本らしい。最後の署名が墨で塗り消され「草稿」と書き直されている。なお羽倉信美（1750-1828）は伏見大社の社家の一族で荷田春満の一族である。上田秋成とも親交があり京百万遍の信美宅で秋成は没している。



「奥書」「刊記」「跋文」

写本の最後に、その本の由来について書かれた一文を見ることがある。「奥^{おく}」といい、書かれた文は「奥書^{おくがき}」と呼ばれる。版本は写本をそのまま版下として製版印刷して刊行するので、奥書もそのまま印刷され、さらに出版情報が付けくわえられているものも多い。付けくわえられた出版情報は「刊^{かん}記^き」という。現代の書籍でも最後に出版年や出版社のデータが載せられて「奥付^{おくづけ}」と呼んでいるが、現代の書籍の「奥付」は古典籍版本でいうところの「刊記」である。編著の最後に著作者、編集者がのせるあとがきもあるが、それは「跋^{はつ}文^{ぶん}」という。もちろん跋文も奥書も刊記もない写本版本も多い。

祖本に奥書がある場合はそれも写されることがあり、「本云」などと肩書されているものはそれだ。これをたどることで、写本の伝来もわかるし、所有者も知ることができる。また写本の貸借関係から学者間の交流の様子なども知ることができる。中には奥書が切り取られていたり、墨で塗り消されていたりするものもあって、そこにその本をめぐるドラマを感じさせてくれるものもある。

■出雲国風土記■

五畿七道諸国に、その土地の地名とその由来、産物や名産品、古老の伝える伝説などを記録し提出せよと元明天皇が命ぜられたのが713年。古事記に続いて来年1300年を迎えます。提出された諸国からの報告書のうち、五か国からのものが『風土記』として残されています。『出雲国風土記』は其中でも最も完全に近い形で伝えられました。桃園文庫には四部の写本が蔵されています。その中から三種類を展示しました。

II-14 出雲国風土記 写本 〔桃34/70〕

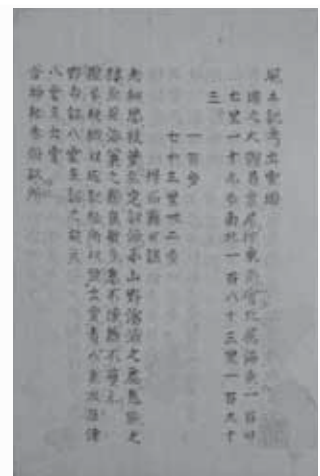
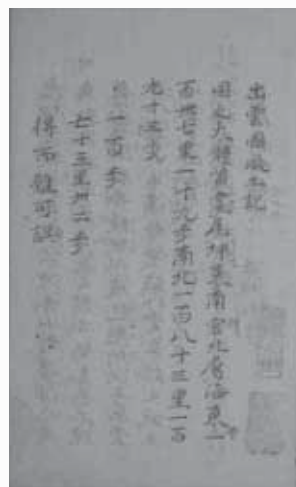
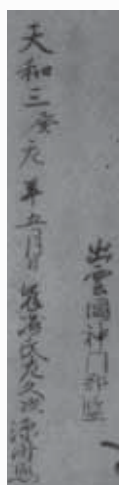
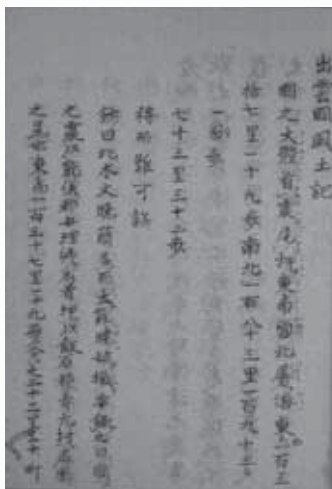
表紙見返しに「神田氏蔵書」とかかれ、冒頭に岸崎時照および破衲宏雄による天和の序文を二種類もつ。岸崎による「出雲風土記鈔」の写本で、本文に「鈔云」として註が施されている。

II-15 出雲国風土記 写本 〔桃34/71〕

「篁園文庫」の蔵書印のある細川家本(永青文庫蔵)の本文系統(加賀郷の神社名を欠く)の「出雲国風土記」である。

II-16 風土記考出雲国 写本 〔桃34/84〕

巻末に「文政五年壬正月廿九日以訂正本校畢 管渚」との奥書がある。細川家本系の本文系統を校訂しており、〔桃34/70〕(→II-14)に伝わる加賀郷の「布自伎弥社」以下の神社名などは別紙貼付されている。



■日本霊異記■

II-17 日本国現報善惡霊異記 景戒 写本 〔桃13/3〕

平安朝初期に編纂された仏教説話集で、古事記と同じく全て漢字で書かれている。日本で顕れた仏教的奇跡の伝承を集めており、古代の民俗・社会の様子が描かれている点も興味深い。それぞれ序文を持つ上・中・下三巻で構成されているが、この写本は一冊に綴じられている。首書に校異等が注され、朱墨で訓点やカナでの付訓が見られる。

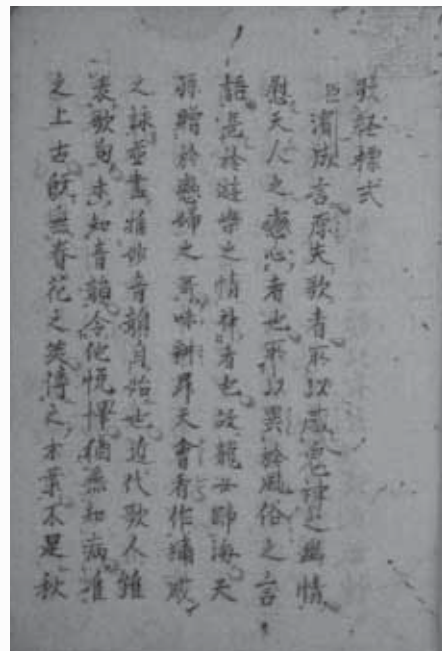


■歌経標式■

II-18 歌経標式 藤原浜成 写本〔桃 25／1〕

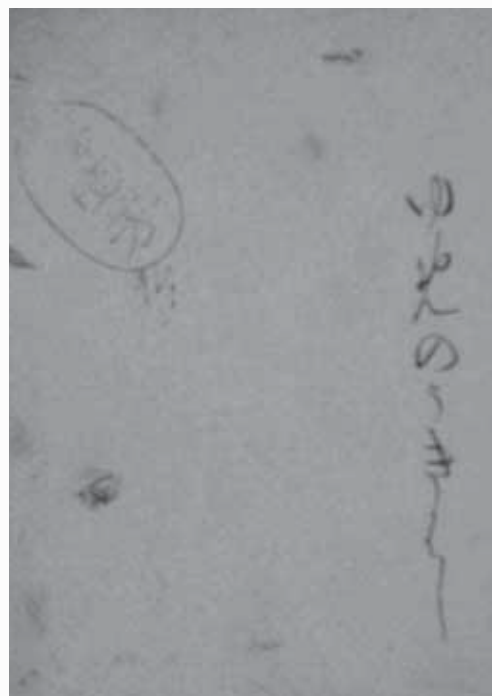
光仁天皇の命令で藤原濱成が編纂した歌学書だと序文は語る。「浜成式」とも呼ばれ、広く受容されたが、漢詩の詩病を援用して、歌体や音韻など歌の形式上の問題を例歌を呈して説明する。

桃園文庫蔵の「歌経標式」は所謂「抄本」と呼ばれる抜粋版で、宝亀三年の序文に続き「和歌七病」から始まり、「新意體」で終わり跋文と系譜が付いて終わる。冒頭から6丁まで、朱で点が書き入れられている。



蔵書印

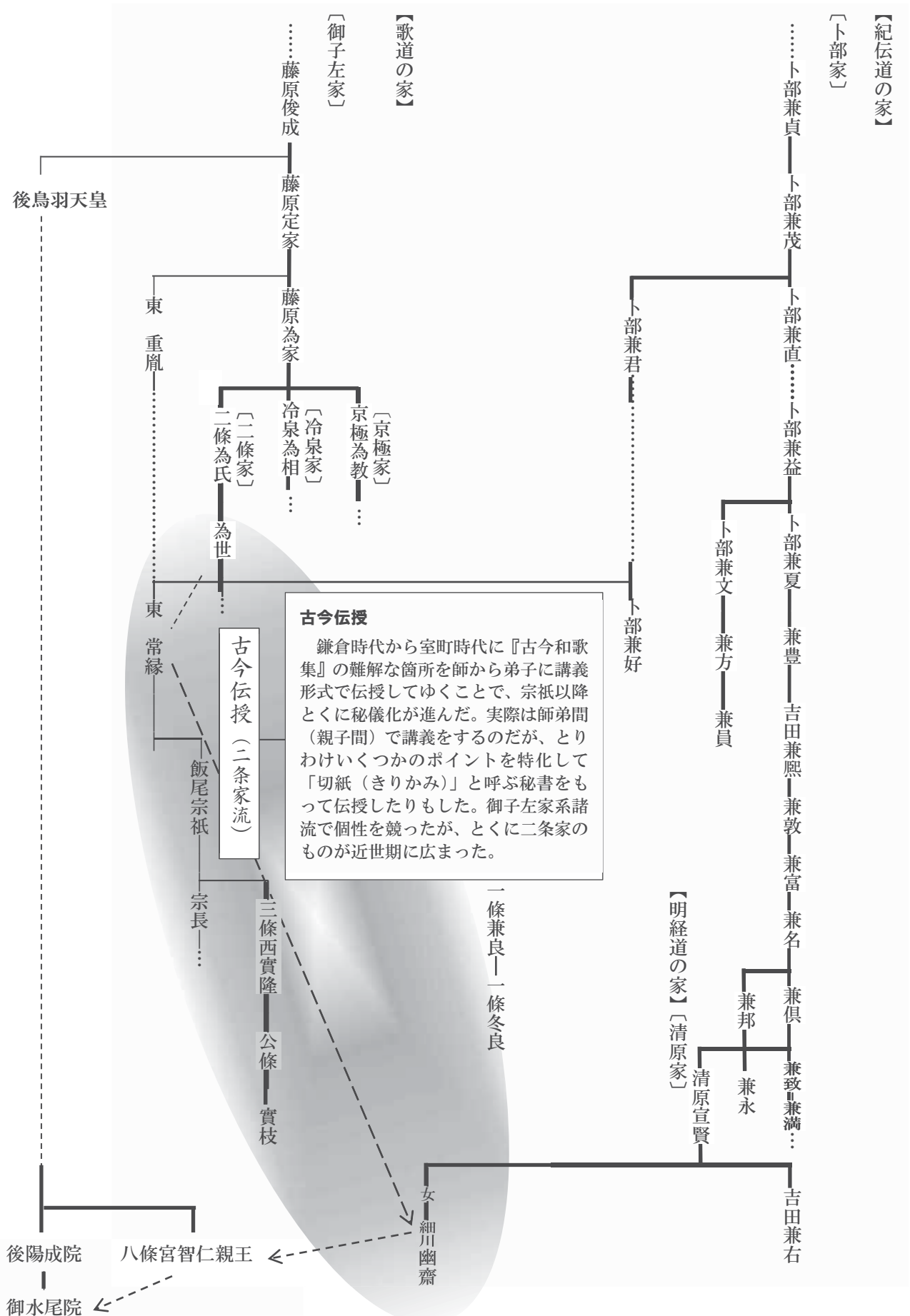
写本や版本には、その本の所有者を示す蔵書印ぞうしょいんが押されていることが多くあります。多くの場合、最初の丁（ページ）の下方、中には表紙の見返しや最終丁に押されています。桃園文庫の本の場合、現在は東海大学図書館の蔵書ですから、「東海大学蔵書」の角印が朱で押されていたり、押印されたラベルが貼られたりしてあります。蔵書印は楷書や篆書で「〇〇蔵書」や「〇〇蔵印」「〇〇之印」などと彫られ円形や方形、独特の図像にしたものもあり、見た目も楽しいものとなります。蔵書印は下方に押されるのが一般的で、所有者が変わるたびにその上方に追加で押印されます（もちろん例外も数多くあります）。蔵書印をたどることで、その本の伝来過程がわかることも少なくありません。中には歴史上有名な人を見つけたりもします。桃園文庫に「勝安芳」の蔵印の押された「源氏物語 夢の浮橋巻」（室町時代初期の写本）がありました。「勝安芳」とは勝安房守義邦、幕末維新に活躍した幕臣、勝海舟（1823－1899）が維新後に名乗った名前です。



〔桃 6／148〕

人間関係図

太い線は親子関係
細い線は師弟関係



Ⅲ 読む・伝える

本文を正しく読む、ということは文学を味わう上でもっとも大切なことです。例えば和歌の中に「鳥」とあっても、それが何の鳥であるのかははっきりしません。その解釈を考え、人に伝えるところと、その解釈を知りたいと思い人に尋ねるところに「学問」が生じます。

古代から宮中では「御読書」と呼ばれる行事が続けられています。天皇や公卿参列の前で四書五経（『大学』『中庸』『礼記』『詩経』『書経』『易経』等）などの漢籍や『日本書紀』の講義が行われます。

『新儀式』という書物（村上天皇の時代の編纂）には、その行事の次第が記録されていますが、本文を読み上げる人と解釈を御進講する人とがいて、参列の公卿からの質疑応答もあったようです。平安時代以来の『日本書紀』の御進講の講義ノート（『日本紀私記』）が何種類か伝えられています。過去の質疑等も記録されていて、写されながら後の講者に伝えられていったもののようです。室町時代の学者、卜部兼熙（→「書写者 卜部兼邦とその一族」参照）とその子兼敦二代にわたる日記『吉田日次記』の中には、吉田神社の祭事を控えて潔斎中の兼敦のもとにある公卿から日本書紀の講義依頼が来たので出かけたことが書かれています。宮中行事だけでなく、貴族の家でも書物を読みたいときに研究者から教えを受けていることがわかります。中には、一條兼良や三條西實隆のように教えを受けた公卿その人が立派な学者になった人もいます。

歌の道も同じです。醍醐天皇勅撰（天皇が命じて編集させること）の『古今和歌集』が登場して以来、国文学を代表する言語芸術として和歌は存在してきました。当時の知識階級の**思想**を支える四書五経、**歴史**——とくに日本の始原を語る『日本書紀』に加えて、人の心を表し伝える**文学**として和歌は大切にされました。ちなみに東海大学文学部は**思想**（文明系4学科）・**歴史**（歴史学科4専攻）・**文学**（言語文学系3学科）に**社会と人間**（心理社会学科・広報メディア学科）を加えて構成されています。

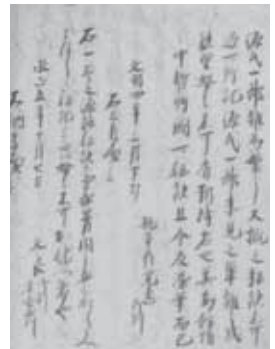
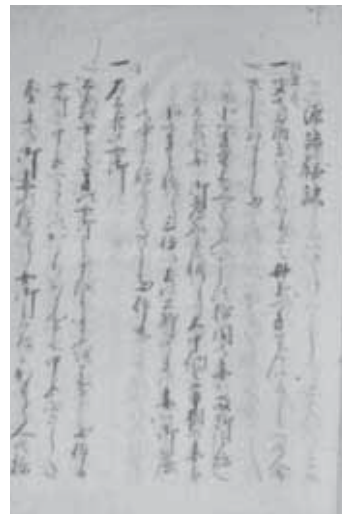
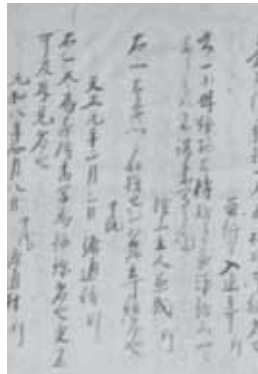
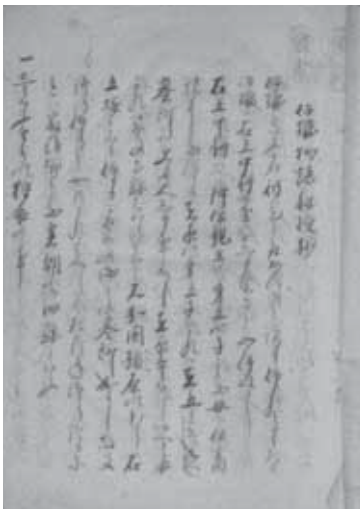
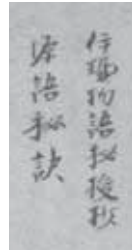
和歌は揺れ動く人の心を三十一文字の中に凝縮して表現します。人の行動や心の動きを語る物語は、和歌の基盤として、また素材として重要な文学となりました。とくに『伊勢物語』や『源氏物語』などは『古今和歌集』と並んで歌を学ぶには必読のものとなります。『伊勢物語』『源氏物語』の写本や注釈書が多く残された背景には、国文学の中心である和歌を学ぼうとする人たちと伝えようとした人々の存在があるわけです。紀貫之たち以来、歌の道にも教える人、学ぶ人があらわれて学問を形成してゆきます。先人がどのような歌を作ったのか。どのような言葉を使うと美しいのか。そうして言語芸術としての「美」の型が生まれてきます。やがてその型を破って新しい美が生まれ、また型ができて崩されてという動きの中、歌の学問（解釈—伝授）を専門とする家が固定してゆきます。その教えは親から子へ、あるいは先生から弟子へと伝授されていきます。教えを受けた人々はその一つのグループとして一派一門を形成します。このとき、解釈の奥義が秘伝として派の中心となる家に伝えられてきました。

その代表が藤原俊成・定家親子の御子^{みこひだりけ}左家です。定家以降、家は二條派、冷泉派、京極派に分かれます。冷泉家はいまでもその伝統を守っていますが、二條爲氏から爲世、門弟の頼阿、東常縁（東野州）、飯尾宗祇などを経て三條西家へと大きな広がりを見せたのが二條派です。桃園文庫の中にもさまざまな伝授書が残されていますが、その多くは二條派の伝授資料のようです。

【1】伊勢物語を読む・伝える

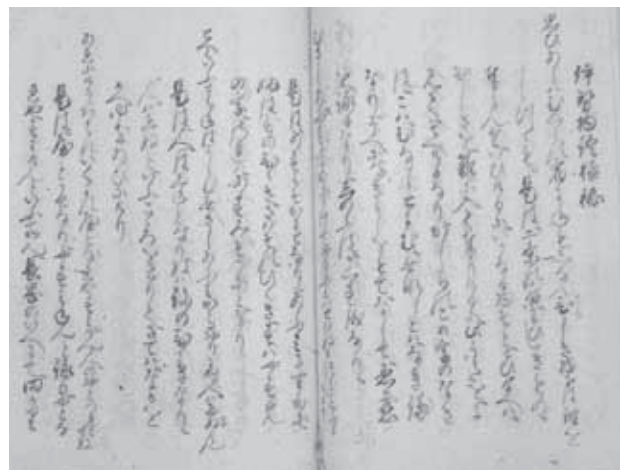
Ⅲ-1 伊勢物語秘授抄・源語秘訣（写本）〔桃3-144〕

『伊勢物語秘授抄』と『源語秘訣』がセットになって綴じられている。『伊勢物語秘授抄』は書名の解説から始まり、本文の語注が一つ一つ付けられている。奥書には、三條西家の学統を細川幽齋からうけつぎ、江戸初期歌壇の重鎮であった中院通勝・通村の名が見える。『源語秘訣』は一條兼良の『花鳥餘情』（→Ⅲ-14）を秘伝として子の冬良に授けたものである。奥書には冬良の名が見える。



Ⅲ-2 大綱初心伊勢物語極秘（写本）〔桃3／4〕

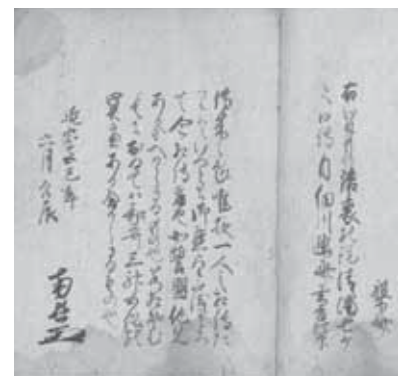
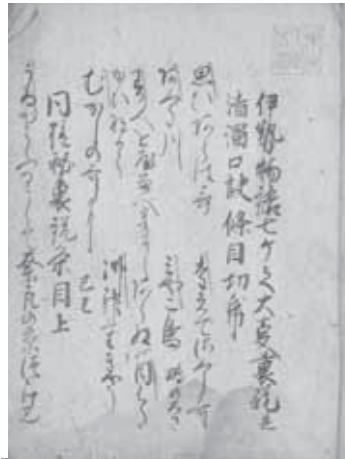
冒頭に仮名序の内容を示す序があり、次から「大綱初心巻第一」として歌詠みの初心者に向けた手引が記される。「立春」「子日」などの項目を立て例歌を並べる。四季分類が終わると、続いて「和歌灌頂に有覚／人丸寺行念誦次第」として人丸影供の作法について記し、次に「伊勢物語極秘」となる。伊勢物語のうち解釈の難しい歌のみをとりあげ歌に用いられている語の解釈を中心に平明な註を施している。「月やあらぬ」の歌に関して「此物語の至極の秘事也」云々という記述があるように、歌の解釈の秘伝書である。さらに「古今和歌序 先一切の物は名目より事おこるならひ也」に始まる、仮名序についての問答となる。奥書には子孫に伝える目的で記し秘伝として函底に隠しておくたとある。



Ⅲ-3 秘書 (写本) 〔桃3/140〕

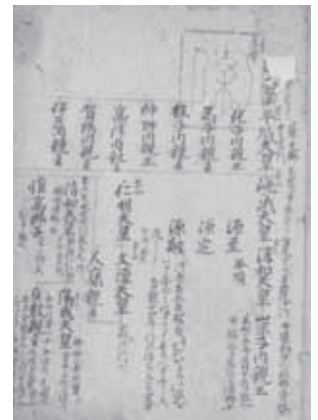
〔桃3/144〕(→Ⅲ-1)と同様、源氏物語とセットで合綴された秘書集。

「伊勢物語七ヶ之大事裏説並清濁口訣
条目切紙」「伊勢物語深秘口伝」「源氏
物語三ヶ之大事口訣の切紙」「空仮中革
囊口伝」からなる。『闕疑抄』のように
詳細で行き届いた注とは対照的に、「七
ヶ之口伝」の断片的な記載があるのみ
である。伝授が秘伝化していく間に生
まれた「切紙」を綴じたものである。



Ⅲ-4 伊勢物語口傳抄 大庭宗分 (写本) 〔桃3/34〕

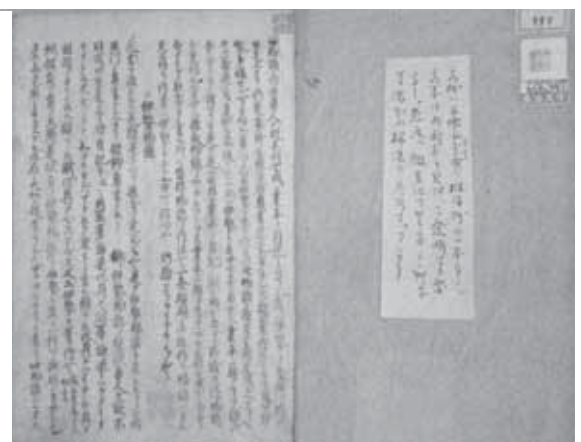
最初に系図があり、次に伊勢物語の解説が述べられ、天福本以下、伝本の奥書の解説を行い、藤原伊行(世尊寺伊行、『源氏釈』の著者)による「狩使本」を批判する。以下、本文を上げ註釈を施す。本文は仮名で、註は当時の口語を筆写した和漢混淆文で書かれている。初段冒頭の「むかし」についての註が最も長く、業平の歌の批評にまで及ぶ。註には「聞書」「一禅御説」(「一禅」は一條禅閣すなわち一條兼良——「花鳥餘情」→Ⅲ-14の著者——のこと)、「聖云」などの諸説を引く。著者大庭宗分(賢兼)は大内義隆の家臣。この写本には「源氏物語系図」(→Ⅱ-4)「細流抄」(Ⅲ-12)と同じ「九條」の印があり、最後に天正二年の聖護院門主道澄准后(1544-1608、近衛植家の子)の奥書が写されている。

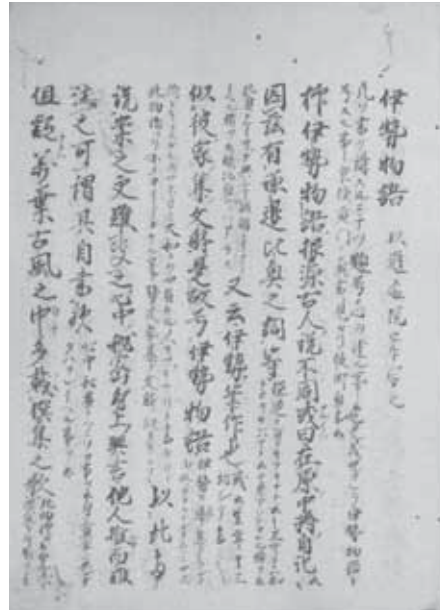
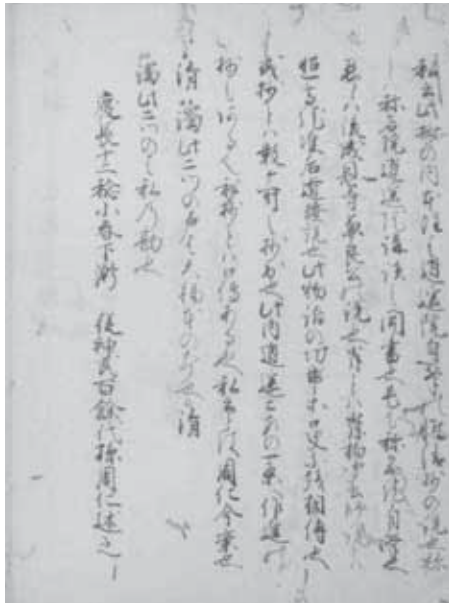


Ⅲ-5 伊勢物語惟清抄 三條西実隆講 清原宣賢聞書 (写本) 〔桃2/40〕

三條西実隆による講義を聴聞者の一人であった清原宣賢が記した注釈書。伝授の証明としての奥書を実隆自身が加えている。旧説にとらわれない一條兼良の説を引用する。「師説」とあるのは宗祇の説と言われる。太目に本文が記され、小さく語句・歌の第一句を挙げて簡略な解説を加えている。三條西家流の伊勢物語注として尊重され、ここから多くの注が生まれていった。

表紙見返しに「この抄は宣賢の惟清抄の一本なり。この本は内閣本と見比べて発明する処多し。巻尾に徹書記自筆本より転写せる諸本の解説あり。参考すべきなり」とある。





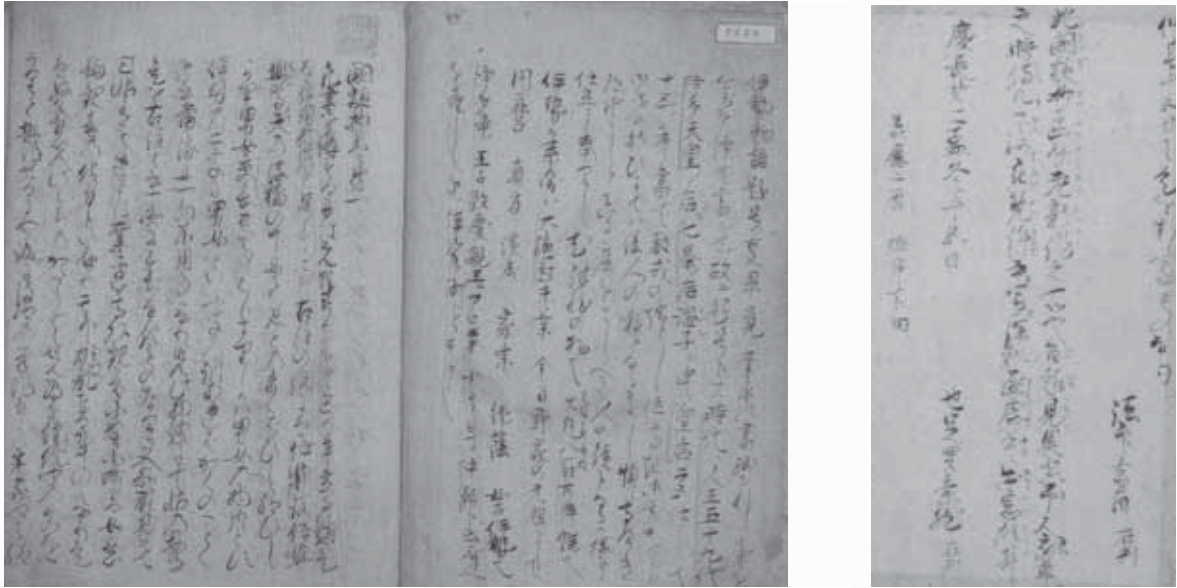
表紙の題簽には「後陽成院 伊勢物語御抄」とあるが、大島雅太郎氏蔵の後陽成院『伊勢物語愚案抄』と本文・体裁などすべて同じとの由、池田亀鑑による注がある。本文を呈し解説が施される。旧来の説に異議を唱えて考証し、自説を挙げる。末尾には系図と人物についての説明（伊勢物語伝本の勘文の解説）となる。本文中の「女」を二條后・染殿后・斎宮・小野小町などに擬している。呈示される伊勢物語本文は冒頭に「伊勢物語 以逍遙院筆写之」とあって三條西家伝来の本文を用いていることがわかる（逍遙院は三條西實隆の号）。表紙を開くと上下それぞれに扉絵となり、上には胡籙を背負った業平と思われる男性像、下には女房装束の女性像（伊勢か？）が描かれている（本パンフレット表紙参照）。口絵には右上に烏丸文庫の印、右下に「光榮」の印があり、烏丸光榮（1862-1748）の所蔵した本であることが知られる。烏丸光榮は烏丸光廣から数えて六代目にあたり、霊元天皇や中院通躬（中院通勝の五世孫）に歌を学んでいる。

ちなみに、いわゆる『伊勢物語御抄』は後水尾天皇が和漢の書を広く涉獵し、後陽成天皇の『愚案抄』を一層徹底させて、精緻な交渉を加えたものである。

後陽成天皇の文化事業

後陽成天皇(1571~1617、1586 即位・1611 譲位)は豊臣政権時代から江戸時代初期という激動の時代に在位された天皇である。細川幽齋から古今伝授(古今和歌集の解釈の秘伝)を受けた八條宮智仁親王の同母兄でもある。田辺籠城で死を決意した細川幽齋の学識を惜しまれ、城の包囲を解くこと、幽齋には城を出ることを勅命で実現させたことはよく知られたエピソードである。自ら伊勢物語や源氏物語を講じもされたが、特筆すべき文化事業は慶長2年(1597)から8年(1603)にかけて、日本書紀神代巻や論語、孟子などを木活字で出版されたことであろう(慶長勅版)。古くより皇室は文芸をよくされているが、自ら出版に臨んだのは、朝鮮経由で日本に伝わった銅活字印刷技術などの最新技術に注目していた開明性をも物語る。文学の伝統と最新技術とが不即不離であることも理解されよう。

Ⅲ-7 伊勢物語闕疑抄 細川幽齋（写本）〔桃3/56〕



三條西實隆が色好み否定、教訓的解釈とともに鑑賞を重視して著した『惟清抄』（→Ⅲ-5）の流れを引き継ぎ、細川幽齋が八條宮智仁親王への講釈を機にまとめたものが『闕疑抄』である。幽齋が講釈を受けた三條西實枝の説を「御説」として引くなど三條西家流の説を尊重しつつ、『愚見抄』や『肖聞抄』等の室町時代の注釈を集大成している。序説には定家本の三本に触れ、今までにない考証が記されている。本文の注釈は見出語を挙げて一字一句について長く詳細に解説している。語源や字義を平易に示し、余白にも多くの注や書き込みが記されている。ほとんど全ての漢字にルビが振られ、解りやすく示す姿勢が一貫している点が特徴的である。広く読者を意識した、開かれた注釈書として、他とは一線を画していよう。著者幽齋による奥書に続いて「慶長第二孟冬十五日 也足叟然在判 承応二曆 極月下旬」とある。「也足」とは中院通勝で母方の祖母が三條西公條、細川幽齋は歌道の師にあたる。細川幽齋の田辺籠城のときには八條宮智仁親王や三條西實條、烏丸光廣らと事態収拾に活躍した。源氏物語の注釈書『岷江入楚』の著者でもある。

Ⅲ-8 伊勢物語闕疑抄 細川幽齋（版本）〔桃3/57〕

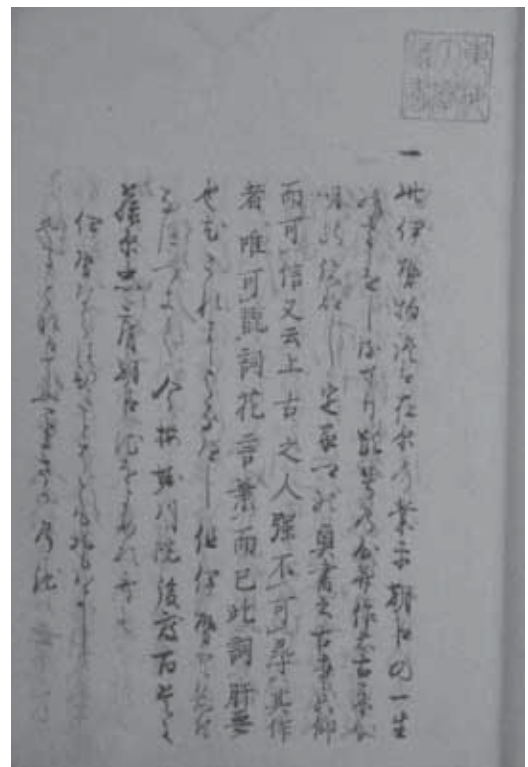
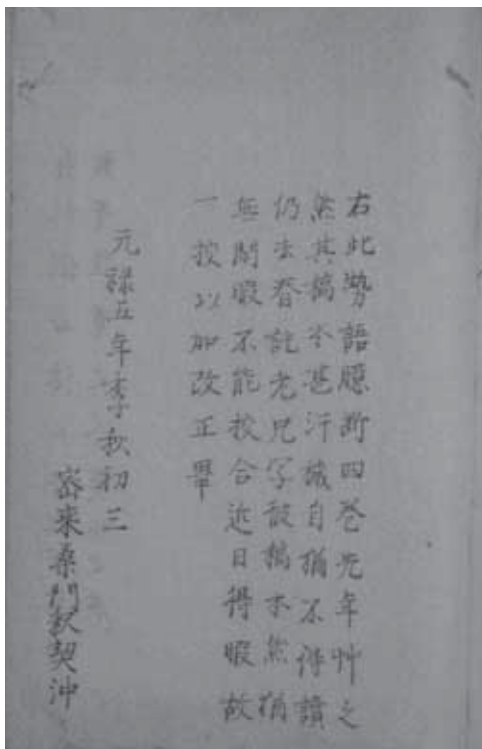
Ⅲ-7と同系統の本を版下とした版本であることは「慶長第二孟冬十五日 也足叟然在判 承応二曆 極月下旬」という奥書があることでわかる。ただし第三巻は別版が挿入されている。

歌人細川幽齋玄旨と古今伝授

剣を塚原卜伝に学び、日置流弓術は吉田雪荷（吉田出雲守重政の子）に、馬術故実を武田信豊（若狭武田氏）から相伝されたという長岡兵部大輔藤孝（細川藤孝）は足利將軍家、とりわけ十五代將軍義昭に仕えた武人として活躍したが、有職故実また歌道にも造詣深く、三條西實枝から二条派歌学の象徴である古今伝授を預かり、その子三條西公国、その子實條へ返し伝授をしている。また二条派歌学の宗家の象徴を返却したあとは、自ら古今集の解釈を深め、八條宮智仁親王（後陽成院の弟）や烏丸光廣、中院勝通らの皇室や公家にも、松永貞徳や木下長嘯子、佐方宗佐らにも古今伝授を施した。八條宮から御水尾院へ御所伝授として伝わり、松永貞徳らへの伝授は地下伝授とよばれる。幽齋玄旨はその号である。

Ⅲ-9 勢語臆断 契沖 写本 〔桃 3/86〕

契沖著。文献資料を駆使し、実証的に注した、いわゆる「新注」の嚆矢。とりわけ作中人物を史実との関連で考察し、単なる業平の一代記という考え方にとどまらない、つくり物語としての虚構性を認めている点に特色がある。これが後の荷田春満、賀茂真淵等の合理主義的な考え方を導くことになる。また、『古今集』詞書との類似に着目して成立について考察する点も注目される。当該写本は、他の写本が五巻構成であるのに対し、〔桃 3/90〕（→Ⅲ-10）と同じ内容をもちつつ春夏秋冬の四巻で構成されている点で注目される。



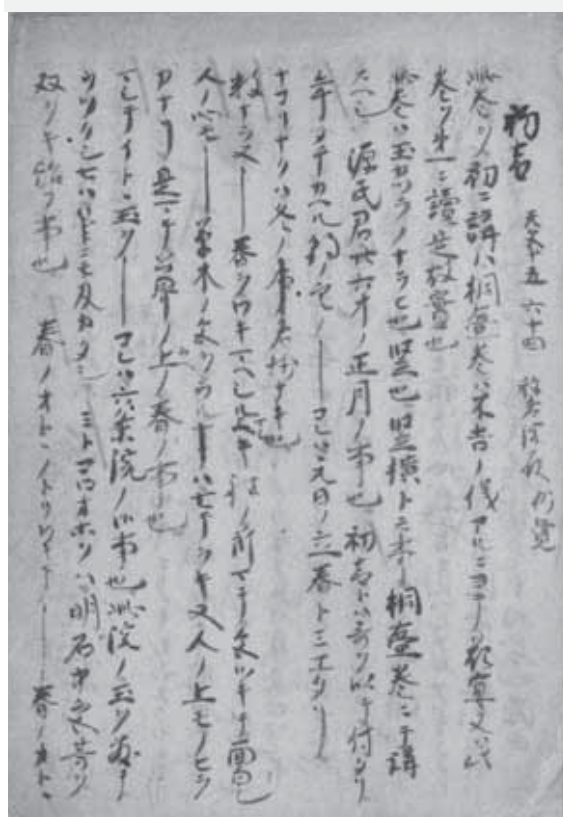
Ⅲ-10 勢語臆断 契沖 版本 〔桃 3/90〕

享和二年刊本には巻頭に成立や作者に関する見解が総論としてまとめられていたが、この享和三年刊本では省略されている。典拠を示し用例を挙げ、客観的な態度で注する姿勢は旧注とは一線を画するものがある。

【2】源氏物語を講ずる・伝える

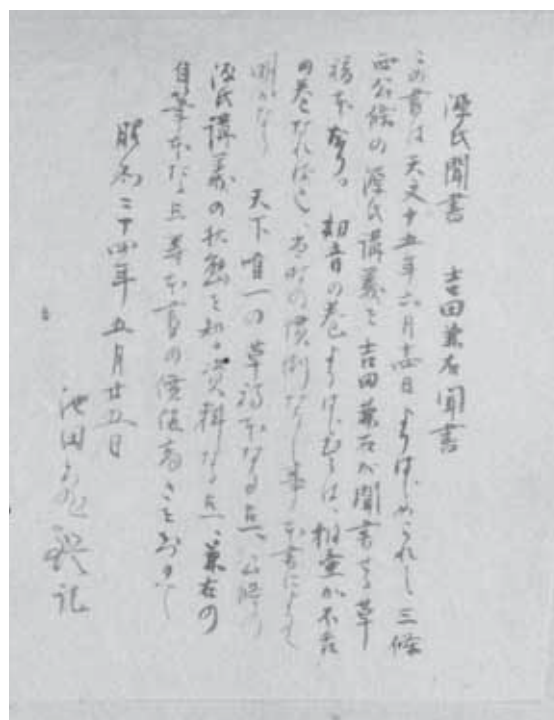
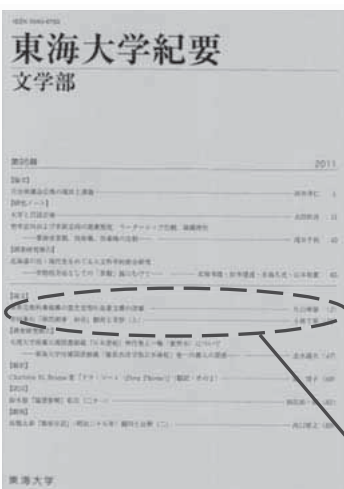
Ⅲ-11 源氏聞書 三條西公條講 吉田兼右聞書 自筆本〔桃7／135〕

三條西公條が講じ、吉田兼右が聞書したもの。吉田兼右は〔桃3／40〕（→Ⅲ-5）に見える清原宣賢の子でト部吉田家の本宗家を継いだ（→人間関係図）。見出し語を掲げ註を「——」（ダッシュ）でつなげて示しているところに、講義に臨んで聞書をする様子をうかがうことができる。本文には青表紙本系の三條西家本を用い、講義内容は『河海抄』『花鳥余情』（→Ⅲ-14）を引用して行われている。「桐壺」巻が「不吉の巻」であるため「初音」巻を巻頭に置く。「初音」巻には栄華を誇る光源氏の住む六條院の、極楽浄土のような美しい元旦の風情が描かれる。ちなみに「初音」巻をモチーフにした蒔絵の意匠も多く製作され、江戸時代には婚礼調度として重んじられた。



小林千草教授による兼右聞書「初音の」翻刻

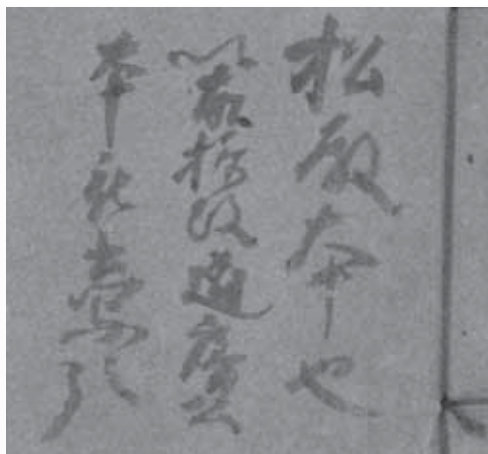
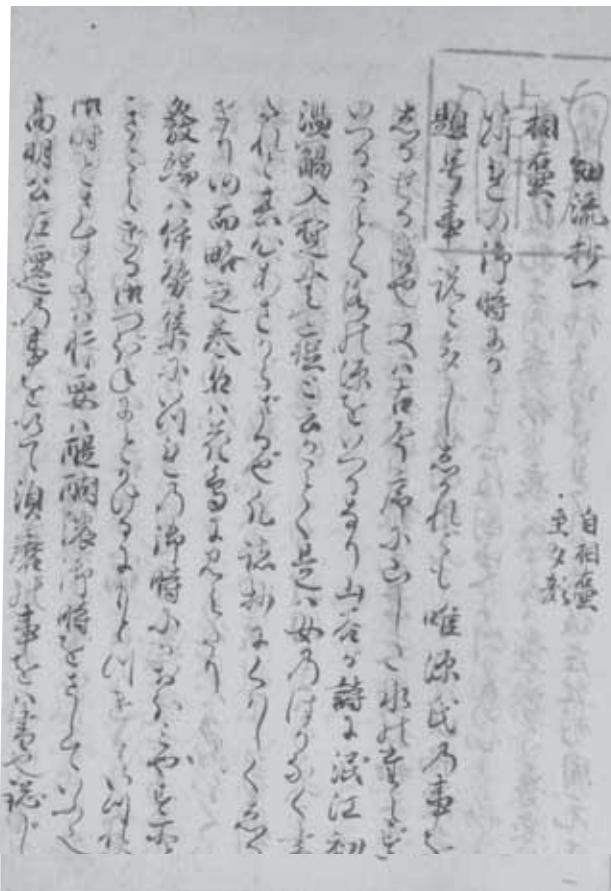
東海大学紀要（文学部）第95輯（2011）に、本学文学部日本文学科の小林千草教授による吉田兼右源氏物語聞書の「初音」の翻刻が掲載されています。



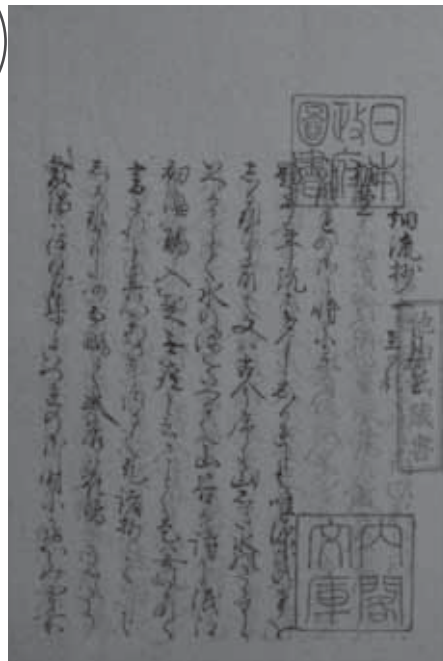
吉田兼右「源氏聞書 初音」翻刻と考察（上）……………小林千草（21）

III-12 源氏物語細流抄 三條西公條間書 (写本) [桃7/132]

三條西實隆による講義を息子の公條が聴聞して作成した注釈書。『花鳥余情』の一條兼良や肖柏の注釈を包摂しつつ、さらに詳細に自説を提示し、自説の立ち位置を明確に示している。出典や難語の考証よりも、文脈の丁寧な読み取り、鑑賞的な注に特色がある。三條西家の源氏学の頂点ともいわれ、『細流抄』のような源氏物語研究の流れが、江戸初期の『湖月抄』を生み出すのである。この写本は表紙右下に「松殿本也。以故摂政道房公本被書写之了」とある。九條道房（17世紀前半の摂関家九條家当主。徳川家光の甥でもある）所蔵本を底本にしたもので、九條家の蔵書印が押されている。「松殿」は道房の弟で名門松殿家を再興した（1642年）九條幸家のことであろう。



10 巻もあるのに持ち上げてみると予想以上に軽い！



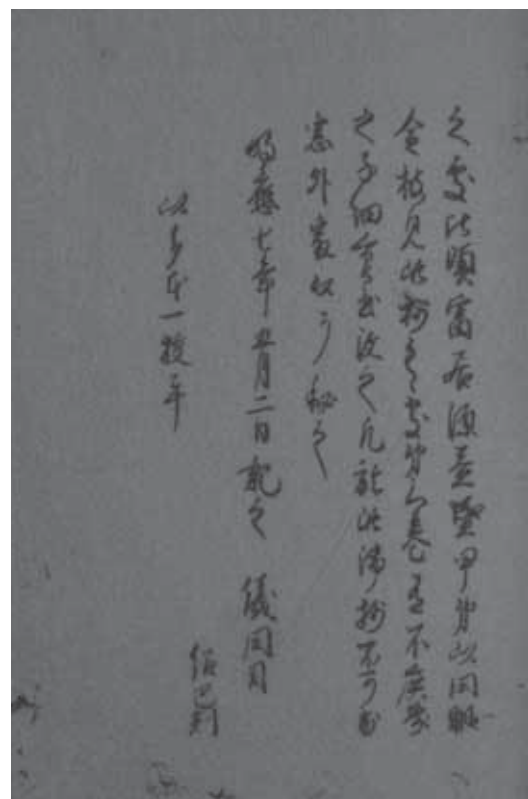
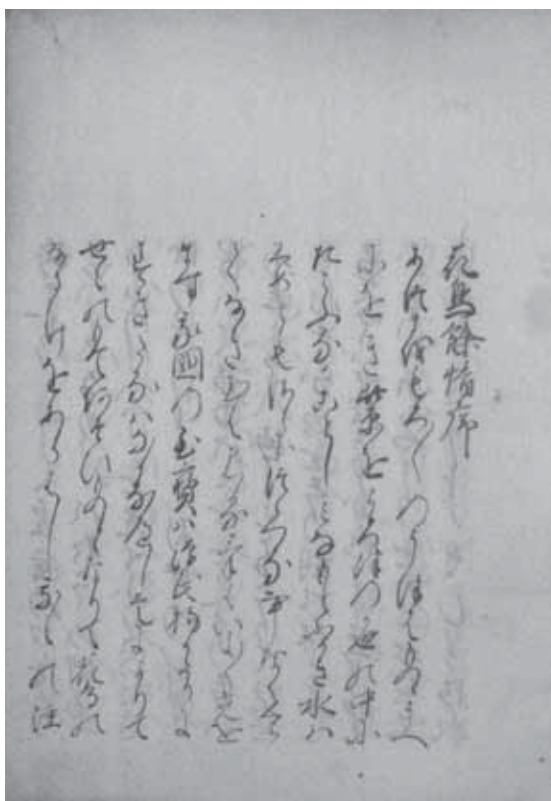
III-13 源氏物語細流抄 (現代写本) [桃7/130]

池田亀鑑による（あるいは指示による）内閣文庫本の写し。蔵書印まで朱で書き写してある。

Ⅲ-14 花鳥餘情 一條兼良 (写本) 〔桃 7/91〕

摂政関白を務めた室町時代の大学者・一條兼良による注釈書。河内本の本文に、簡潔な注を付す。『源氏釈』に始まる従来の諸注釈書とは異なり、語句よりも文を長く引いて、文意・文脈に関わる注に力が注がれている。また、有職故実に関する注にも出色のものがある。これらの意味で、注釈史上で分岐点となる画期的なものである。『花鳥余情』が史実・出来事に重点を置いたことで、読解の助けとなる注を付ける『細流抄』へとつながっていく。

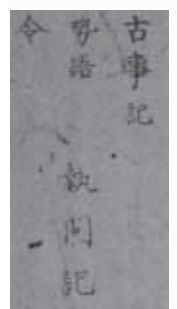
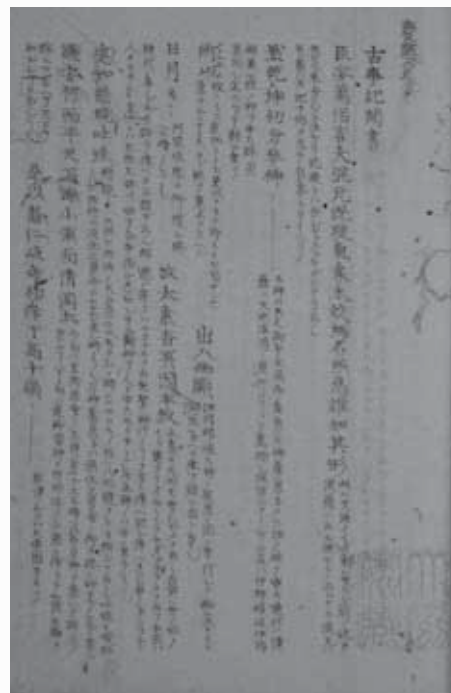
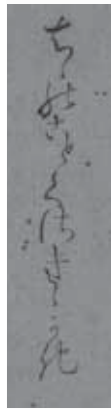
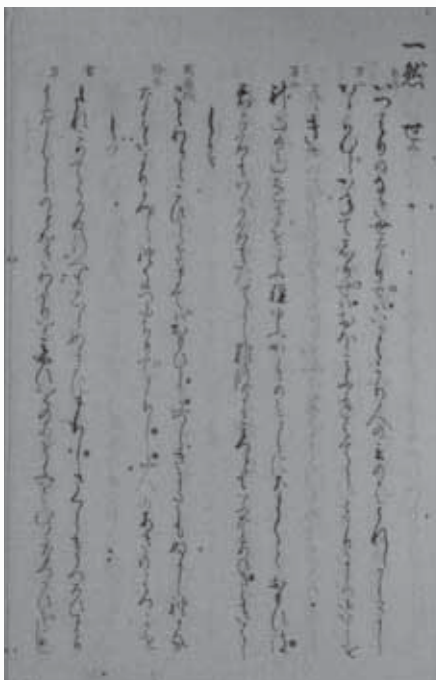
この写本の奥書の末尾には「以多本一校畢紹巴判」とあり、〔桃 6/34〕(→Ⅱ-12)とともに連歌師紹巴の源氏物語享受のありさまをうかがえる。



【3】その他の古典を読む・伝える

Ⅲ-15 古事記聞書 〔桃 34／7〕

前半は扉に「古事記 勢語 令 執問記」とあるように、「古事記」「伊勢物語」「令」などの本文中の語の解釈についての聞書、後半は「ちゝのこことく御きゝかき」とあって歌語例歌集のようにになっている。「古事記聞書」は序文からはじまり下巻までの神名を中心とした難解語句の解説が書かれ、冒頭に「慶応二年」の字がみえるので、幕末の講義録であろうか。続いて伊勢物語の語釈が同様に置かれ、官位令、職員令、神祇令、僧尼令、戸令、田令、学令、選叙令、継嗣令、考課令、禄令、宮衛令、軍防令、儀制令、衣服令、營繕令、公式令の順で語釈が続く。最後は類聚三代格の語釈で終り、交代式の語註が貼付されている。中扉に「ちゝのこことく御きゝかき」とあり、まず歌の品詞分解したものを数丁貼付したあと主に語用の立場から歌をあけて例示している。後半は「仮用四韻活」の題目を上げ、同様に語の用い方を例示してある。

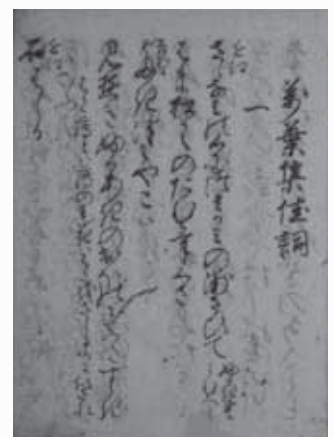
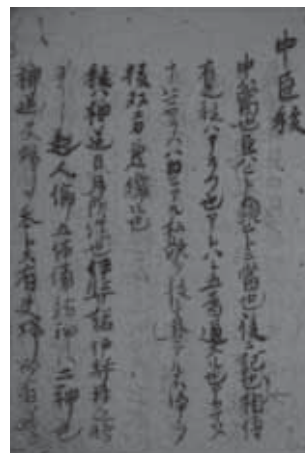


Ⅲ-16 中臣祓解 服部安休 写本 〔桃 35／6〕

神道で重要視された中臣祓の注釈書。服部安休は森蘭丸の孫で、江戸時代初期の儒学者・神道家。会津藩主保科正之(徳川家光の異母弟)に仕え、会津土津神社の神官も務めた。山崎闇斎と論争し、闇斎に神を学ばせる契機を与えたことでも知られる。

Ⅲ-17 万葉集佳詞 写本 〔桃 28／1〕

万葉集の歌を抜き書きしたもの。奥書によれば、藤原為家(1198-1275)の自筆本を冷泉為秀(?-1372、為相の子)が写したものの天文20年(1551)の写本である。



■展示書目 書誌一覧■（『桃園文庫目録』による）

Ⅱ－１ 土左日記〔桃 21／20〕 写本 一冊

胡蝶装 紙表紙（金・銀泥による霞・野毛文様に金銀切箔散らし） 雁皮紙 17.2 cm×15.9 cm 9行 51枚 外題中央 「青谿書屋」印

Ⅱ－２ 源氏物語〔桃 6／49〕 写本 九卷九冊 闕 室町末期写

胡蝶装 空押文様紙表紙 鳥の子紙 21.9 cm×14.4 cm おもに 8行 題簽中央（後題簽・各巻名）

Ⅱ－３ 源氏物語 宿木巻〔桃 6／138〕 写本 一冊 鎌倉末期写（伝二條為氏筆）

胡蝶装 桐鳳凰文金欄布表紙 見返金銀泥による霞引金砂子銀切箔野毛紋様 雁皮紙 23.4 cm×15.4 cm 10行 221丁 題簽中央 「素履居藏」印

Ⅱ－４ 源氏物語系圖〔桃 8／142〕 写本 一軸 闕 鎌倉初期写

卷子本 紙表紙 楮紙 28.6 cm×682.0 cm 内題・外題共なし。「九條」印

Ⅱ－５ 源氏物語系圖〔桃 8／143〕 写本 一軸 闕 鎌倉初期写力（伝越部禅尼筆）

卷子本 二重蔓牡丹唐草文様金欄布表紙 楮紙 29.9 cm×725 cm 内題・外題共なし 「文草蔵書」印

Ⅱ－６ 徒然草 〔桃 19／11〕 写本二卷二冊

袋綴 紺地に金泥による御子に満月の紋様紙表紙 楮紙 29.0 cm×22.0 cm 9行 題簽左肩

Ⅱ－７ 徒然草 〔桃 19／33〕 写本二卷二冊

袋綴 藍色紙表紙 楮紙 30.4 cm×22.2 cm 11行 題簽中央 「青谿書屋」印

Ⅱ－８ 伊勢物語〔桃 2／1〕 写本 一冊 室町中期写

胡蝶装 鳳凰織文紺地表紙 見返金泥雲霞文様 楮紙 20.8 cm×15.6 cm 一面9行 88丁 題簽左肩

Ⅱ－９ 伊勢物語〔桃 2／14〕 写本 一冊 室町中期写

胡蝶装 金泥紙表紙 鳥の子紙 24.0 cm×16.4 cm 九行 85丁 題簽左肩

Ⅱ－10 伊勢物語〔桃 2／23〕 写本 一冊 （豊原秋統筆）

胡蝶装 布表紙 23.9 cm×17.4 cm 9行 78丁 題簽中央

Ⅱ－11 源氏物語〔桃 6／52〕 写本 七卷七冊 闕

袋綴 黒色紙表紙 鳥の子紙 25.7 cm×19.1 cm 10行 題簽中央（各巻名） 「一泓壘中」印

Ⅱ－12 源氏物語〔桃 6／34〕 写本 四十六卷四十六冊 闕 江戸初期写

袋綴（仮綴） 紙表紙 楮紙 25.8 cm×19.3 cm 10行 題簽左肩（各巻名） 「一泓壘中」印

Ⅱ－13 真名伊勢物語〔桃 2／35〕 写本 一冊

袋綴 紙表紙 27.2 cm×18.9 cm 14行 30丁 外題左肩

Ⅱ－14 出雲国風土記〔桃 34／70〕 写本 二卷二冊

袋綴 紙表紙 25.0 cm×18.2 cm 9行 題簽左肩

Ⅱ－15 出雲国風土記〔桃 34／71〕 写本 一冊

袋綴 紙表紙 26.1 cm×17.2 cm 7行 82丁 題簽中央 「篁園文庫」印

Ⅱ－16 風土記考 出雲国〔桃 34／74〕 写本 一冊

袋綴 紙表紙 26.9 cm×26.8 cm 13行 43丁 外題左肩 「滋岡庫」印

Ⅱ－17 日本国現報善惡靈異記〔桃 13／3〕 写本 三卷一冊

袋綴 紙表紙 26.9 cm×19.2 cm 10行 85丁 題簽左肩 「篁園文庫」「芽垣内蔵書」印

Ⅱ－18 歌経標式〔桃 25／1〕 写本 一冊

袋綴 紙表紙 26.0 cm×18.0 cm 8行 17行 題簽左肩

- Ⅲ-1 伊勢物語秘授抄〔桃 3/144〕 写本 一冊
袋綴 (仮綴) 紙表紙 24.5 cm×17.5 cm 11 行 13 丁 外題中央
- Ⅲ-2 大綱初心伊勢物語極秘〔桃 3/4〕 写本 一冊
袋綴 布表紙 27.7 cm×20.1 cm 10 行 130 丁 題簽右肩 「艮輔」印
- Ⅲ-3 秘書〔桃 3/140〕 写本 一冊
袋綴 紙表紙 27.4 cm×20.5 cm 12 行 22 丁 外題中央
- Ⅲ-4 伊勢物語口傳抄〔桃 3/34〕 写本 四卷四冊
袋綴 雷文地桐文紺色紙表紙 楮紙 27.4 cm×19.6 cm 13 行 題簽左肩 「九條」印
- Ⅲ-5 伊勢物語惟清抄〔桃 3/40〕 写本 一冊
袋綴 白地に雲母による菊花唐草文紙表紙 楮紙 22.5 cm×16.0 cm 10 行 121 丁 題簽左肩(欠落)「島田藏書」印 (巻末に判別不明印あり)
- Ⅲ-6 伊勢物語御抄〔桃 3/75〕 写本 二卷二冊
袋綴 雲母刷の紙表紙 鳥の子紙 26.7 cm×20.6 cm 10 行 外題中央 「烏丸文庫」「光榮」印
- Ⅲ-7 闕疑抄〔桃 3/56〕 写本 五卷一冊
袋綴 紙表紙 26.2 cm×19.4 cm 12 行 166 丁 題簽右下
- Ⅲ-8 闕疑抄〔桃 3/60〕 刊本 五卷二冊
袋綴 紙表紙(原表紙の上に改装表紙) 27.7 cm×18.5 cm 12 行 題簽左肩 「鎌田氏藏書」「鎌田正憲藏書」「關島觀川」印
- Ⅲ-9 勢語臆断〔桃 3/86〕 写本 四卷四冊
袋綴 紙表紙 26.3 cm×18.3 cm 10 行 題簽左肩
- Ⅲ-10 勢語臆断〔桃 3/90〕 刊本 五卷五冊
袋綴 紙表紙 26.3 cm×18.1 cm 四周単辺 匡郭内 19.4 cm×14.9 cm 12 行 題簽左肩 版心(「勢語臆断」巻・丁数)「廣美之印」印 表紙に「凹邨文庫」紙標
- Ⅲ-11 源氏聞書〔桃 7/135〕 写本 二冊
袋綴 紙表紙 楮紙 24.2 cm×18.4 cm 13 行 外題中央
- Ⅲ-12 細流抄〔桃 7/132〕 写本 一冊 闕
袋綴 紙表紙 27.3 cm×19.6 cm 13 行 98 丁 外題中央 「九條」印
- Ⅲ-13 細流抄〔桃 7/130〕 現代写本 十卷十刷
袋綴 紙表紙 26.6 cm×19.4 cm 10 行 題簽左肩 「日本政府圖書」「内閣文庫」「祕閣圖書之印」印の写しあり 「池田氏藏書」印
- Ⅲ-14 花鳥餘情〔桃 7/91〕 写本 三十卷十冊
袋綴 紙表紙 26.8 cm×19.8 cm 10 行 題簽左肩
- Ⅲ-15 古事記聞書〔桃 34/7〕 写本 一冊
袋綴 紙表紙 24.0 cm×16.5 12 行 42 行 題簽左肩 「大洲家藏」印
- Ⅲ-16 中臣祓〔桃 35/6〕 写本 一冊
袋綴 紙表紙 23.7 cm×17.1 cm 8 行 28 丁 外題左肩
- Ⅲ-17 万葉集佳詞〔桃 28/1〕 写本 一冊
袋綴 紙表紙 20.1 cm×15.3 cm 8 行 46 丁 外題なし



東海大学付属図書館（湘南校舎4号館内）

國文學の傳燈 写す・読む・伝える——桃園文庫の世界——

会期 平成24年5月10日～6月30日

会場 東海大学湘南校舎11号館 東海大学付属図書館11号館分室展示室

東海大学付属図書館・東海大学文学部日本文学科 共催

構成・解説 志水義夫（東海大学文学部日本文学科教授）

解説 佐藤 瞳（東海大学大学院文学研究科日本文学コース博士課程単位取得・横浜隼人高校非常勤教諭）

文責：志水義夫

Special thanks to C.S. & Y.S.



展示期間：2012年5月11日（金）～6月30日（土）
展示会場：東海大学附属図書館 11号館図書館展示室